

## 曲目解説

### Anime alla Derive ( 彷徨える霊 )

Ugo Bottacchiari (ウーゴ・ボッタキアリ) 作曲

中野 二郎 編曲



Ugo Bottacchiari

作者は 1879 年に生まれ、1944 年に逝ったイタリアの作曲家。名声を高めたのはオペラ「影」で 1899 年に初演され大成功を収めた。マンドリン関係では本邦では「交響的前奏曲」で親しまれているが、出版社がボローニャのコメルリーニ出版社である為に他の作品があまり日本には入っていない。しかし、前述の「交響的前奏曲」はマンドリン合奏に携わる者が、皆その魅力にとりつかれている名曲である。作者の晩年に当たる 1941 年シエナで行われたマンドリン楽作曲コンクールに最高入賞した「夢の魅惑」もマンドリン楽の珠玉であるが、作者は遂にその出版を見ずに逝ってしまったのである。亡霊を扱った歌劇「影」、その他にも「イル・ポート(誓い)」、「夢! うつつ!」等、夢幻的な着想のものが多いのは、マンドリン楽が抱懐するロマンティズムを披瀝するのには最も格好なものであったからに違いない。本曲「彷徨える霊」の原曲は管弦楽である。宗教的意味合い(鎮魂歌)を込めてなのか、比喩的な標題音楽なのか、作曲背景は定かではない。マンドチェロによる冒頭の旋律は和声の微妙な変化をつけながら、マンドリンに受け継がれて行く。不安、焦燥、優しさ、など様々な情景を見せ Grandioso に向かって各声部は交錯した和声を展開し、最高潮に達する。高揚するロマンの薫りは、かの「イル・ポート」や「交響的前奏曲」の手法にそっくりである。総譜には interlude とあるようにわずか 92 小節の「間奏曲」であるが、短い中にも一つのドラマがあり、潮がひく様に静まっていった後の沈黙は何とも言えないものがある。1977 年 8 月 5 日同志社大学マンドリンクラブ長野演奏会(長野県篠ノ井市民会館)にて本邦初演。

### 悲愴序曲「受難のミサ」

鈴木 静一 作曲



Seitei Suzuki

作者は日本のマンドリン文化を作品の面で支えてきた最大の功労者である。1901 年、東京生まれ。A.サルコリの元で声楽家を目指すも師の勧めで断念し、マンドリンを弾き始める。1924 年、イタリアに渡る。途中シベリウスに会い才能を認められ作曲活動を開始。1927 年、オルケスタ・シンフォニカ・タケイ 主催の第 1 回作曲コンクールに「空」が 2 位入賞した。処女作「山の印象」を発表後、多数の作品を発表したが、1936 年、日本ビクター入社と共にマンドリン界から一時身を遠ざけた。1965 年に復帰するまで、約 450 曲に及ぶ映画音楽、流行歌の作曲を手掛け、商業音楽の世界で、頂点を極める活躍をした。黒沢明監督「姿三四郎」や「たんたんたぬぎの〜」の替え歌で歌われた「煙草屋の娘」が有名。多くのマンドリン合奏曲、クラシックの編曲作品を発表すると同時に、数多くの学生マンドリンクラブの技術指導にも情熱を注ぎ、マンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。1980 年 5 月 27 日、惜しまれながら永眠。本曲は 1970 年に作曲された。岐阜マン

ドリンオーケストラ機関紙「フレット」第 14 巻の手記(1971 年 12 月 30 日発行)より以下の様に引用する。

私は大正末期に黎明と祝典の 2 序曲を書いているが、その頃から形式音楽を好まず、今日もひたすら標題楽を書き続けている。そんな私は、“受難のミサ”の副題こそ持つが、ソナタ形式による「悲愴序曲」を書かせたのは、或る日かけ放しの FM から流れ出していた“日本 26 聖の殉教”のミサ曲であった。聞くともなく聞くうちに私は単声で合唱されるグレゴリオシャントにふと楽想を揺すられた。同時に、その 26 聖人の礫(はりつけ)の絵画をどこかで見た事を思い出した。フィレンツェカトリノかはっきりしないが博物館か画廊であった。その時、礫柱にかけられた多くの殉教者の顔に日本人の面影は認められたが、それが日本 26 聖であることはかなり後から知った。そんなことでこの素材に手をつけたが、序曲などの意識なく書き始めた—それがいつとなく型とおりの序曲になって行くのに気付いたが、不思議に抵抗は感じなかった。日本にキリスト教が伝えられたのは 1543 年種子島に漂着したポルトガル船がきっかけとなり、同じポルトガルの布教者によると歴史は伝える。そしてこれが西欧文化の渡来の始まりでもある。我国における所謂“キリシタン”の伝道は、順調に進み、織田信長・豊田秀吉の時代に向け、ひとつのピークを築いたが、天正 16 年(1587 年)に到り、それまで黙認していた秀吉が、突然布教を禁じ、大阪を中心に近隣に存在する教会堂を破壊し、布教者や信者を追放した。追われた人々は、熱烈な信者であった島原の相馬氏をたより九州に流れ入り、相馬氏の居城、原城下には宏大な天主堂が聳え、附近に建てられたコレジオやセミナリオには神学生があられ、祝祭日には鐘を響かせ、オルガンを鳴らし、厳かなミサが行なわれるなど、まるでヨーロッパの都市とまごう盛況を呈したという。しかし世が徳川に移ると幕府のキリシタン弾圧は峻烈をきわめ、あの恐怖時代が来る。島原、天草の乱はかくして起こり、今日もカトリックのミサに残る“日本 26 聖の受難”はその時代の悲惨な殉教の一例である。

# Symphony No.5 in d-minor Op.47

交響曲第5番二短調 作品47

Dmitrii Dmitrievich Shostakovich (ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ) 作曲

小穴 雄一 編曲

1906年9月25日サンクトペテルブルクに生まれ1975年8月9日モスクワにて病没。享年69歳。

マーラー以降の最大の交響曲作曲家としての評価を確固たるものにした20世紀最大の作曲家の一人である。彼の音楽には暗く重い雰囲気のものが多いが、その一方でポピュラー音楽も愛し、ジャズ風の軽妙な作品も残している。

生前、旧西側諸国においては、体制に迎合したソ連のプロパガンダ作曲家というイメージで語られていたが、1980年ソロモン・ヴォルコフが著した『ショスタコーヴィチの証言』が出版されて以後、その評価は一変した。この本は、その後の研究によって偽書との疑いが強くなっているが、それまでの「ソ連の御用文化人」というレッテルが一挙に引き剥がされ、「自らが求める音楽と体制が求める音楽との乖離(かいり)に葛藤した悲劇の作曲家」という見方が広まり、これによって演奏回数を大きく増やすとともに、今日の評価や支持を確立したという功績は否定できないであろう。

ソ連の芸術政策に少なくとも表面上は迎合し、分かりやすい音楽を多く作曲したため、難解な現代音楽が隆盛した20世紀のクラシック音楽界にあっては珍しく大衆的な成功を勝ち得た稀有な作曲家のひとりとなった。

## 【スターリン体制下におけるショスタコーヴィチの危機「ブラウダ批判」】

旧ソビエト連邦では、1920年代の終盤から30年代にかけて、スターリンが事実上の独裁体制を築きあげていく過程において、本来表現の自由が追求されるべき芸術・文化においても、政治、イデオロギーの介入が強まっていった。社会主義国家の発展のために、一人でも多くの労働者大衆を、芸術を通じて社会主義建設に目覚めさせ、鼓舞しなければならぬとする「社会主義リアリズム」の表現方針が提唱され、あらゆる芸術分野で公式に採用されるに至った。

その結果、ソ連においてすべての芸術はこの政治方針に添った「模範」や「粹」からはみ出すことを許されなくなった。美術でも音楽でも文学でも、労働者や農民大衆にもわかりやすく写実的筆致で、ロシアに古くからあった伝統的な画法や旋律、様式をもちいることが求められ、これに反するとみなされた作品は激しい批判と攻撃を浴び、こうした作品をつかった作者・作曲家は厳しい弾圧を受けることとなったのである。「ブラウダ批判」事件はその代表的な例であった。

「ブラウダ批判」とは、1936年1月28日のソ連共産党機関紙「ブラウダ」に掲載された、ショスタコーヴィチの歌劇『ムツェンスク郡のマクベス夫人』を批判する社説のことである。社説は「音楽のかわりの荒唐無稽」と題され、この歌劇を社会主義リアリズムを欠くブルジョワ・形式主義的音楽であると激しく糾弾した。これは、当時ショスタコーヴィチが、「社会主義リアリズム」に反する西洋モダニズムの影響を受けた楽曲を数多く作り、大衆の人気を博していたことに対して当局が危機感を抱き、社説を用いて彼の失脚を企図したものであった。この社説はショスタコーヴィチの音楽活動に大きな影響を与えた。彼の作品は『ムツェンスク郡のマクベス夫人』はもちろんのこと、ほとんどの作品が上演されなくなった。一緒に粛清されるのを恐れ、共に行動する者もいなくなった。また、彼自身も、モダニズム色の強い交響曲第4番の初演をとりやめている（この作品は、1961年まで封印された）。すなわち、この批評は単なる芸術作品の批評にとどまることなく、最終的に作曲者のショスタコーヴィチ自身を「体制への叛逆者」としておとしめることへまでつながっていき、彼は活動の基盤を完全に失うこととなってしまったのである。

## 【交響曲第5番二短調作品47『革命』】

このような厳しい状況にさらされる中、ショスタコーヴィチはそれを超人的精神力で耐え抜き、名誉回復を図って次の作品の作曲を開始した。その作品の1つが、この交響曲第5番である。1937年4月から7月にかけて作られたが、この曲の成功によって、ショスタコーヴィチは「ブラウダ批判」によって陥った危地を脱したのみならず、一挙に栄光の頂点に立つこととなったのである。では、ショスタコーヴィチは、この曲で社会主義リアリズムを賞賛し、名誉を回復することと引き換えに、スターリン権力に屈服したのであるだろうか？ これについては、『ショスタコーヴィチの証言』以降、さまざまな解釈が存在することとなった。そのひとつに、彼は己の音楽家、芸術家としての良心のサバイバルのために「二枚舌」を使ってただに抵抗したのだ、というものがある。『証言』において、ショスタコーヴィチは、第四楽章のフィナーレに関し、これが「強制された歓喜」であり「喜べと命令されているのだ」と語ったという。この証言が信頼できるものなら、それは逆説的にこの曲がスターリンに対する忠誠の証ではないことを認めたことになる。

また、第四楽章の再現部には、ビゼーのカルメンのパロディを巧みに織り込んでいるとう説もある。その『ソドレミ』というメロディにはカルメンの中のジプシーの『信じるな』という台詞がついており、それがスターリンの政敵や粛清に対する巧みな批評であるとも解釈できるというのだ。このような「仕掛け」が施された音楽をロシア革命20周年記念の場で発表したということであれば、実にしたたかな二枚舌の作曲ということがいえよう。

一方、この曲は、社会主義賛歌という仰々しい性格を持つ音楽ではなく、「愛の音楽」であるとの見方も出されている。

第四楽章終結部にラ音（A）が強くアクセントをつけて何度も繰り返されている箇所がその根拠である。このラ音が、シヨスタコーヴィチがつかの間の恋に身を焦がした女性の名を表しており、これを繰り返すことで彼女への思いを捧げたというのである。その数なんと総計252回。社会主義の勝利を高らかに謳う曲の中に、私的なものを刻印することによって、この曲を体制のための音楽ではなく、自分のための音楽としたという見方である。

また、このラ音を古いロシア語の読みに従って「私」だとする解釈もある。「私」を何度も連呼することで、スターリン権力の中で自立する個としての自分を刻み込んだというのである。言い換えれば、スターリン体制下で、芸術家としての自分の刻印をいかに残すかという絶望的ともいえる試みとして、この交響曲第5番は存在するという見方である。

1937年11月21日、ロシア革命20周年記念日に、エフゲニー・ムラビンスキーの指揮、レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団にて初演され熱狂的な喝采を浴びた。我が国では1949年2月14日、山田耕作指揮、日本交響楽団第304回定期演奏会（日比谷公会堂）にて国内初演となった。交響曲史上の屈指の傑作とされ、世界中のオーケストラのスタンダード・ナンバーとなっている。（この項の執筆にあたっては、NHK教育テレビ「知るを楽しむ」テキスト『譜面の中の二枚舌〜シヨスタコーヴィチ』ならびにフリー百科事典ウィキペディア等を参考、引用。）

## 編曲者紹介

**小穴 雄一**（おあなゆういち）1957年東京生まれ。慶応義塾高等学校入学後マンドリンを始める。マンドリンを竹内郁子女史に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。慶応義塾大学4年次に常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らマンドリン奏者の青山忠氏が主宰する「クリスタル・マンドリン・アンサンブル」の客演指揮、「プレクトラム・ソサエティ」「アンサンブル・アメデオ」の指揮者兼編曲者として精力的に活動中。

今回、私共の為にこの難解な交響曲を快く編曲して下さい、心よりお礼申し上げます。

## 交響曲第5番 編曲秘話 小穴雄一

そうは見えなかったかもしれないけど、内心、途方に暮れていました。初めて、シヨスタコーヴィチのアレンジを依頼された時のことです。たいてい、なんでも引き受けてきましたので、また、他ならぬ福シンのからの依頼でしたので、何くわぬ顔で、「いいですね！」などと、まったく意味不明なことをばを弄していました。

交響曲第5番を初めて聴いたのは、おそらく高校の頃だったと思います。最後の楽章の炸裂するティンパニだけが妙に頭に焼き付いてしまって、しばらくは残像のようになってごびりついて離れませんでした。ですから編曲を依頼された瞬間、あれか！と思いました。あの勇壮で、けたたましい金管はどうしよう？いきなりちょっとだけ不安なものか過ぎるのでした。まあ、なんとかなるだろう。いつも、引き受けるときの、この「なんとかなるだろう」というのがくせ者で、断れない性分なので、大変なことになってしまいます。いざ、取り組もうと思い、スコアを眺めてみたら、これはえらいものを引き受けてしまったと、いよいよ呆然となるのでした。実際、例の最終楽章以外は、かすかな記憶しか残っていませんでした。

そこで、あらゆる演奏を片っ端から聴きあさりしました。しかし、あたりまえのことですが、演奏にはバラエティーがありました。これでもかというくらいにしつこい演奏や、なんだかあっさりして、妙に冷たく無機質に感じられる演奏もありましたが、一番気に入ったのはインバル指揮、ウィーン交響楽団の演奏。出だしのモチーフも力み過ぎることもなく、ただ深い音で、まるでうめき声の様に何かを訴えかけてくるようでした。まるでそれ自体が生き物のようで、そのモチーフはさまざま表情を変えて変化していくのでありました。このCDだけは、すべての楽章が格調高く、何度も聴き返しました。マンドリン合奏の要はギターにあると、最近ますます思うようになりました。どうしても画一的なサウンドに陥りがちな、マンドリン合奏のなかで音色に多彩な響きをもたらしてくれるからです。ギターの高い音はときにはまるで天使の声のように聞こえることでしょう。楽器のおよそあらゆる音色の多様性のレンジをいかに発揮するかで、表現の幅もひろがっていくのだらうと思います。しかし、このあたりの適材適な音色をどう実現するかというのは弾き手にゆだねられてはいるというものの、アレンジしたときの、思い入れというのものないわけではありません。ただ、それとても単なる思い込みに過ぎず、音造りの実践のなかで、ひとりひとりの奏者の英知により最適なもの練り上げられるに違いありません。ほくも、自分なりにには可能なかぎり尽くしてあらゆる音源を聞いて作曲者の意図するものが何だったのかを求めてさ迷いました。

シヨスタコーヴィチは確かに無数の音符の合間から、語りかけてきました。きっと本番の瞬間にも降りてきて、一番後ろの席に座るかもしれません。もし、近くだったら、そっと耳打ちしてみますね。「今日の演奏は、ずばりいかがですか？お気に召しましたでしょうか？」ところが問題は言葉が通じないということですね。質問だけ言っても、返事がわからないだろうな。でも、不思議ですよ、音楽では通じ合えるのですから。福シンの初演どうなることでしょう！遠く離れていますので余計にときめています。しかし、現場はそれどころではないかもしれませんね。難しいパッセージの連続でおそらくぼろぼろになっていることでしょう！本当にこの未曾有の偉業に挑まれる福シンのみなさんに、こころから敬意を表しますとともに、アレンジの機会を与えてくださったことに感謝いたしております。初演の成功と、みなさんの健闘を祈ります。

## 交響曲第5番に寄せて 常任指揮者 松永恒一

福シンは特にこの10年、ムソルグスキーの「展覧会の絵」やドボルザークの「弦楽セレナーデ」「交響曲第9番」などクラシックの著名曲を中心とした意欲的なプログラムに取り組んできましたが、今回はいよいよショスタコーヴィチの交響曲第5番を演奏します。率直に言ってこの選曲は、マンドリン合奏のプログラムとしてはかなりの冒険で、原曲をよく知る人の中からは無謀だという声も聞こえてきそうです。2年前の年明け早々、この「第5番」の編曲を小穴雄一氏にお願いしたところ、超多忙の中、快く引き受けていただきました。この曲を演奏するなら今の福シンしかない、という思いで編曲者と演奏者の意気込みが合致し、マンドリン合奏版の世界初演が実現したのです。この曲に取り組んだことは団員にとって生涯の記憶に残るに違いありません。マンドリン界にとっても賛否両論沸き立たせ、一石を投じることになれば「冒険」の意味もあったということでしょう。「第5番」は、練習を開始した直後から、多くの団員が原曲のスコアを入手して丹念にチェックし、担当楽器における演奏方法やアーティキュレーションを工夫しました。スコアを読めば読むほど、この交響曲のスケールと奥深さ、音楽のち密さやその構成など、いままで体験したマンドリンオリジナルの作品とは一味もふた味も違うものが感じられたのです。編曲版の楽譜を手にし、初めてマンドリン合奏版の「第5番」が音になった、その瞬間の感銘はいまでも忘れられません。眼前に新しい世界が開けたような気がしました。福シンでこの「第5番」の演奏が実現したのは、相当のマンドリン合奏経験を持つ個々の団員が、その経験に基づく常識、あるいは先入観にこだわらなかつたからかも知れません。経験を積むのはとても大切なことですが、特に指揮者は、自己都合の「常識」のみに頼り、安易に「マンドリン音楽とはこんなものだ」と決めつけてしまってはならない、私は常々そう考えています。それは、経験と背中合わせになっているだけに、指揮者にとってなかなか困難なことなのですが。その思いでこの「第5番」には、可能な限り、先入観を排除して取り組みました。演奏してみて感じたのは、表面のみを磨く皮相的な曲作りでは歯が立たない、ということです。音楽の内面に深く踏み込んだ解釈に基づく演奏が必要でした。その一方で、極めて基本的な指揮技法、つまり、打点や身体の構え、手、足、首、顔などの安定、そして集中力、間の取り方、「形」とらわれず「型」を守る一など、確実に揺るぎのない棒さばきが随所に要求されたのです。本来それらの基本は、どんな曲であれ変わりはないはずなのですが、ともすれば無意識のうちに油断し、誤魔化していたことが、この交響曲ではむき出しになります。指揮に説得力がないと曲に跳ね返されるのです。私は「第5番」を振る時はマンドリンオーケストラであることを忘れていません。ただ音楽の本質に迫りたい一心です。マンドリン音楽は未だ成熟していません。市民の音楽活動として活発な反面、一般メディアに乗ることも少なくコマーシャルベースからも乖離した存在ですが、社会の推移に目を向けたとき、音楽の在り様として文化の一翼を担う可能性を秘めていると思っています。どのような作品を取り上げても、マンドリンオーケストラならではの表現を最大限に生かし、その作品に新しい命を吹き込む気概で取り組みたいものです。今回のプログラムは、「第5番」の他はボツキアリの「彷徨える霊」、鈴木静一の「悲愴序曲『受難のミサ』」の2曲ですが、それぞれイタリアと日本のマンドリンオリジナル曲です。「第5番」がある意味冒険としたら、他の2曲はお家芸のようなもの、と言いたいところですがはたしてどうなるか。編曲作品にしっかり取り組みと、マンドリンオリジナル曲の持つ別の深さ、難しさも見えてきます。今回は、福シンのマンドリンオーケストラとしての集大成、そういう演奏会になると確信しています。ご期待ください。

## 選曲秘話 コンサートマスター 山口章太

「一年の計は選曲にあり」それほど選曲は大事な問題です。今回(40回)のプログラムは39回定期の選曲とほぼ同時に決めました。39回定期では、ギタリストの中野義久氏を迎えて、ロドリゴの「アランフェス協奏曲」で一度は決定しました。編曲は小穴さんです。しかしロドリゴの遺族側は、編曲の許可を承諾しません。ショット・ミュージック(株)と言う日本の音楽著作権と演奏用楽譜を管理する出版元と交渉しましたが見事玉砕です。音楽著作権と言う大きな壁を感じました。同時に40回定期を考えると非常に不安になりました。35回定期で演奏したムソルグスキーの「展覧会の絵」は「滑稽さと深刻さ」「速いものと遅いもの」「重いものと軽いもの」など相対的な曲想とロシア風の響きが絶妙に混じり合い、新たな可能性を感じました。さらなるマンドリン合奏の新たな可能性を追求出来る作品を・・・と考えて閃いたのが、今回の「交響曲第5番」です。根底に流れる抑圧的な音楽。限りなく繊細な抒情性の世界から、この世の終わりを劇的に表現してみせたかの様な世界まで、その心理描写はマンドリンに向いていると思いました。早速、管理している出版元に問合せしたところ、費用を払えば編曲の許可と演奏の許可が下りると言う事で、指揮者と小穴さんに同時に打診をしたところ、「振りたい、編曲したい・・・」と言う返事が速攻で戻って来ました(予想通りの展開でした)。それは2006年の12月中旬の事だったと記憶しています。その後の選曲会議で、バーンスタインの振る交響曲第5番のCDを聴かせながら、これを40回で・・・と皆の顔色を見ながら切出しましたが、「いい曲だ・・・特に3楽章が泣ける程いい!」「福シンでしか演奏出来ないだろう」「難曲だが演奏するだけの価値がある」と言う前向きな意見ばかりでした。無謀かも知れないが失敗を恐れず真摯に音楽と向き合う姿勢が、福シンの凄さです。正式に編曲依頼したのは2007年1月です。2007年12月に完成予定でしたが、音楽の神様はなかなか小穴さんには降りて来ません。完成は、2008年5月中旬でした。早速音取りを行いました。音の配列が予測出来る従来の曲と違い、落とし穴の様に思わぬ箇所に出てくる#やbの多さ、限界に近い高音域のフレーズ処理とその速度に驚異を感じ、「響き」への問題点も沢山見えて来ました。正に指揮者も奏者も楽器も限界への挑戦と言っていいでしょう。表面をなぞるだけの「音楽を置き去りにした演奏」からは何の感動もなく、伝え様とする大事な心も伝わって来ません。何事も軽く済ませ様とする今の風潮には、いささか食傷気味です。重要なのは、伝えようとする音楽そのものに「説得力」があるかないかと私は思います。とても残念な事が一つ・・・今宵の演奏を誰よりも楽しみにしていた仲間が39回定期の終演直後に倒れ、一緒に弾く事が出来ません。舞台袖では調弦を終えたメンバーが、その仲間の為にも、心をつにしてこれから完全燃焼をするであろう初演の開演ベルを待っています。私共の想いが皆様の心の奥底に届けば幸いです。

## 第 40 回記念定期演奏会に寄せて

### 小林 利彰(石川県金沢市在住)

私と福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル（以下、福シン）との出会いは、8年前に社会人1年生として関東から福岡に赴任し、マンドリン専門店「フォレストヒル」で頂いた福岡マンドリン連盟合同演奏会のパンフレットを手にしたところからです。学生時代に演奏していた曲がパンフレットに載っていたことを懐かしく思い、福シンの門を叩きました。会社関係以外に知人がいない私にとっては、福シンは福岡の「家族」のような存在で、毎週土曜日の練習をとて楽しみにしておりました。3年ほど前、関東へ転勤となり、昨秋、石川県金沢市に転勤となりましたが、現在も遠方会員として福シンに参加しております。福シンの魅力の1つは、学生からシニア世代まで、マンドリンを初めて間もない人から音楽マニアまで実に様々なメンバーが一つになって演奏していることです。また、久しぶりに練習に参加しても、まるでいつもいるかのようにあたたかく迎えてくれます。私にとっての福シンは音楽に向き合える場であり、第2の故郷のような場所です。個性あふれるメンバーが奏でるハーモニーをお楽しみ頂ければ幸いです。

### 小林 良子(石川県金沢市在住)

私が福シンで演奏し始めたきっかけは学生からの延長といういたって平凡な理由でした。学生時代を熊本で過ごし、マンドリンもそのころから始めました。卒業後は福岡に戻り、インターネットを眺めて福シンにたどり着きました。とりあえず軽い気持ちで練習風景を見に行きました。そのときの演奏は申し訳ないですが、あんまり覚えていません。メンバーの皆様、本当にごめんなさい。それより初めて見に来た私に「今日楽器持ってきてない？」と明るく話しかけてくださった方の印象が強く、迷うことなく次回練習から参加することとなりました。後々過去の演奏曲目を見てみると、その独特の選曲から練習についていけないのではないかと冷や汗をかきました。いざ練習をしてみると、音のダイナミックさ、メンバー1人1人が音楽と素直に接する姿勢にとても勉強することが多かったです。社会人1年生の私にとっては幅広い世代の先輩方がいらっしゃるの、いい社会勉強にもなりました。さて、先述したとおり、私は福岡生まれの福岡育ちで九州から一歩もでたことのなかったのですが、なぜここに文章を載せているかというと、実は主人と出会ったのが福シンで、今は主人の転勤で石川県金沢市に住んでおり、遠方会員として限られた回数ですが、練習に参加しています。福岡から離れたことで福シンとも距離ができることが残念でしたが、連絡を頂くことも多々あり、そんなに距離を感じませんでした。久々に顔を出しても「いつも練習に来ているようだ」と言われることで、リラックスして練習に参加できました。福シンは私にとって現実から逃れられる場所であり、音楽を一番楽しめる場所です。本日お越しいただいた皆様、演奏を続けることに協力してくれている家族、なによりも福シンのメンバーに感謝したいと思います。

### 橋 康生 (広島県広島市在住)

福シンは独自の「音」を持っている。現在、色々なマンドリン団体がありそれぞれが活動を行っているが、それらは団体の【主催者】や【演奏する曲のジャンル】等により個性が表わされている。

当然そういった個性は福シンも持っているが、福シンが他の団体と異なる点は独自の「音」を持っていることである。このことは、マンドリンの音を大切にする為に、音の調和が取り難い管楽器をあえて使用せず、マンドリン系楽器中心で演奏に取り組み音を作っていることに表れている。また、選曲においてクラシック等を取り上げる際に、マンドリン系楽器中心では音の色彩感が減少する事を理解した上で、曲の構成を壊さぬように編成に合わせた編曲を行うなど、曲そのものを大切に考えるだけでなく、楽器の調整、調弦、曲の解釈等厳しく取組んでいる。このように忘れられがちなことも、当然の様に取り組むことができる団体であり、これにより福シンの「音」を生み出している。

私はこの「音」にこだわる福シンのファンであり、引き続きこの福シンの「音」に関わって行きたいと思っています。

### 石井 芳和 (埼玉県川口市在住)

福シンには第24回の定期演奏会から参加していますが、最初に観た福シンの演奏会は、弾きごたえのありそうなマンドリンオリジナル曲を中心に、難易度の高さにもかかわらず弾きこなしている姿が印象に残っています。

そんな演奏の魅力に惹かれて入会してから、今回で14回目の演奏会を迎えることが出来ました。

今回は東京からの参加ですが、これまでの活動のうち3分の2は県外から遠方会員として活動してきました。

毎週の練習には参加できないため普段は個人練習し、秋に行われる合宿が唯一合奏で合わせられる機会です。

最初の合奏では、他のメンバーが作る曲の雰囲気に入っていきけるかな？という不安があります。それが違和感なく入っていきけるのは、団の持つ雰囲気や指揮者のリズムが変わることなく受け継がれているからではないかと思えます。

東京では関東に転勤してきたメンバーが集まり関東支部を結成しました。最近では徐々に人数が増え各パートが揃いましたので、いつの日か東京で演奏会をするのも夢ではないかもしれません。

## 濱砂 菜美子（長崎県対馬市在住）

福シンとの出会いは2001年の第33回定期演奏会です。そこで演奏された、組曲「樺太の旅より」はマンドリン界の大家の作として既に耳なじみであったはずの作品でしたが、まるで全く新しい音楽のように感じられました。作品への貪欲な読解とその再現力に感動した私は、一団員として同じステージに立つことを夢想するも、当時まだ学生だった身としては、社会人団体への入会はせいっぱいの背伸び。それこそ弟子入りを志願するような神妙な心持ちで、福シンの門戸を叩いたのでした。それから8年。大学卒業後は地元佐世保で働き、諸々経て、現在は国境の島・対馬から遠方会員として参加しています。練習もろくに参加できず、この数年の間には定演の舞台上に上がれなかったこともありましたが、ナントカは遠くにありて想うもの。この状況のお陰で今、福シンの魅力と、自身の音楽に対する想いを強く感じています。久しぶりに練習場へと向かう日は、5時間の船路もなんのその、至って楽しいものです。合奏では毎回違った福シンの音色を見ることが出来る。しかし、いつも変わらないのは、メンバーの音楽に対する真摯なまなざし。練習場に入った瞬間に、きっと自分も同じ目になっているに違いない。そう感じられる限り、これからも私は、どんなに距離があろうと練習場へと向かっていると思います。

## 杉山 勝（第1回から第40回まで連続参加している唯一のメンバー）

私が入会したのは昭和41年3月。当時の名称は福岡労音マンドリンアンサンブル（第13回定期演奏会から、福岡シンフォニック・マンドリンアンサンブルに改名 \*提案者は現在常任指揮の松永恒一）練習は毎週水曜日、博多駅の近くの東住吉公民館で行っていました。興味があつたので、ギターを抱えて練習を覗いてみました。私は21歳 本当に若かった。ギター暦はヤマハ音楽教室で約1年半位、最初に楽譜を渡されたのは、あの有名な「古戦場の秋」でした。しかし、合奏経験がほとんど無かった私は、全く手も足も出ない状態でした。今でもこの曲を聴くとあの時の苦い経験を思い出します。ただ、最初に覗いた練習のこの日が、私にとって運命の日となりました。練習が終わり、年に1回の定期総会となり、役員の大改選が行われたあと、有志の方から労音マンドリンアンサンブルではなく、新しいマンドリンクラブを結成する旨呼びかけが行われました。当時の日本の社会は戦後の混乱から立ち直り、東京オリンピックの成功をばねに経済は高度成長をはじめる頃でした。しかし、総資本と労働組合が厳しく対決していた時代でもあり「良い音楽を安く聴こう」という趣旨の基に急速広まった労音運動に対しても、いわゆる「アカ」攻撃が激しくなっていたころでした。私は、少し心配でしたので翌週バイクを飛ばして東住吉公民館に行ってみました。するとどうでしょう。先週は20名位の方がおられたのに、今週は女性の方が3名で練習されていました。「みなさんどうされましたか?」と尋ねると「杉山さんはギターですね。是非、福岡労音マンドリンアンサンブルに入って下さい」と当時の会長だった小堀千恵子さんからの言葉は今も忘れません。その時から私と福シンと付き合いが始まりました。

以後、メンバーを増やすために、友人・知人への呼びかけ、また、労音例会でのピラまき、新聞への募集投稿、など積極的に組織活動に取り組みました。その結果、約1ヶ月後ぐらいにはメンバーも10名ほどに増え、以前福岡労音マンドリンアンサンブルを指導されていた中島定良さんを指揮者に迎え、新たに大学のマンドリンクラブの経験者の入会もあり、マンドリンアンサンブルとしての活動を続けて行く事が出来ました。

そして1年後の昭和42年5月12日に明治生命ホールで労音合唱団との合同演奏会を成功させました。

当時、ほとんどのメンバーが浅い演奏経験しかなかったため、この合同演奏会の成功は大きな勇気と希望を与えてくれました。そして福岡労音マンドリンアンサンブル独自で演奏会を持ちたい、という気持ちが急速に大きくなりました。

月曜日は舞鶴公民館での初心者練習、金曜日は貰の子公民館で合奏練習 週2回の練習体制が確立されたのもこの頃です。この初心者練習の中から多くの初心者の方々が、マンドリンの基礎を学び、合奏に参加されるようになりました。

この初心者練習を献身的に支えて頂いた、当時の九州大学マンドリンクラブの香西洋さんには本当に感謝したい。オテル教則本によりマンドリンの基礎練習を指導して頂きました。

そして昭和43年12月4日に第1回の演奏会を、市外電話マンドリンクラブより安藤博子、近藤淑子、九州大学マンドリンクラブより古賀一蔵氏の賛助出演の基に明治生命ホールで開催することが出来ました。まさに、この1回目の演奏会は私の原点であり、今日の福シンの原点がこの演奏会ではなかったかと思っています。第1回～第10回、第11回～20回、第21回～30回、そして第30回から本日の第40回へと紆余曲折はありましたが、こうして第40回記念演奏会を迎えることが出来た事は感無量です。

現在の福シンを支えているメンバーは第17回以降のメンバーが中心ですが、常任指揮者の松永恒一、コンサートマスターの山口章太 両氏のマンドリン音楽への情熱はまさに福シンの屋台骨です。今後も両氏を中心に、若い新たな血をふき込み、これからもマンドリンの可能性を追い求め、更なる挑戦を期待したいと思っています。

最後にこの数年編曲でご協力頂いている、小穴雄一氏に心よりお礼を申し上げます。

## 中野義久 ギタリスト 福シンOB・元指揮者

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルの皆さん、そして全国各地にいらっしゃるであろう福シンOB・OGのみなさん、創立40周年おめでとうございます。というようなご挨拶は、本来は遠くにおいて当日参加できない大物の方が述べるべき事なんでしょうが、僕は本日ステージ上で現役の方々と同じように汗を流しつつ演奏している・・はずですが、随分昔（25年くらい前？）に福シンに在籍し、二年間（記憶が確かなら・・）指揮者を務めさせていただいた関係か、何やら文章を寄せなさい！とのことですので、昔話その他お話しさせていただきたいと思います。

北九州は門司港の出身で大学時代は京都で過ごし、縁あって博多（福岡・・というのは北九州の人間にはピンと来ないので）の楽器屋さんでギター教室の講師を始めることになった僕にとって、この街は全く馴染みのない所でした。そんな時、同僚のマンドリンの講師に誘われるまま入会したのが、この「福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル」でした。今考えますと、会社勤めの経験のない僕にとっては、この団体は社会勉強の場であり、メンバーである多くの人生の先輩方を見て育った若き日の人生の師・・のようなものだったと思います。ホントにいろんな面白い人がいました。今でも面白い人たちはたくさんいるんでしょうけど・・昔々は、定演が終わってシーズンオフになると練習参加メンバーがガタッと減るので、何とかしようとしていろいろ課題を作ってこられた方がいました。毎年々々演奏会の曲を変えると深めることが出来！ということでポツキアーリの「交響的前奏曲」を二年続けて取り上げたこともありました。今と違って第二部ステージにはギターアンサンブルがあったので、夜遅くに某個人宅に集まって練習したこともありました。僕は当時独り者で、“鳴かず飛ばず”の“飲まず食わず”でしたが時間だけはあったので参加しましたが、他の男性メンバーは家庭があり働き盛りの中堅どころが多かったはずで、今思えば皆さんスゴいエネルギーだったな・・と驚きます。また、あるギターメンバーのおうちでは一宿一飯の義理で度々ギターをひかされ（?）、「あんた、そんなウデじゃ心配やね、将来どうするんね」なんてハッパをかけられたこともあります。今ではその人も、多少認めてくれてるかな？

他のマンドリン団体は知りませんが、この「福シン」は昔から新しい事にチャレンジすることに抵抗がない、といえますかノリの良さでホイホイと頑張れる、そんなところがあるんじゃないかなと思います。10年前の分裂（?）騒動も、“路線の違い”なんて言う狭い見の話しではなく、いい方に考えればお互い新しいことに身軽にチャレンジしていくための「発展的ビッグバン」なんでしょうね。ともあれ、これからの「福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル」及び関係の皆さんの将来の幸せと発展を祈りますと共に、今後の「福シン」がどう柔軟に新しいことにチャレンジして行くのか、思いもよらない未知の領域を開拓して行くのか期待したいと思います。

1958年北九州市門司区生まれ。中学より独学でギターを始める。岡本一郎、佐野健二の両氏にギターを学ぶ。1981年第27回九州ギター音楽コンクール第1位。1984年第11回日本ギターコンクール第2位。1986年、日本のマンドリン界の第一人者、川口雅行氏と共に、ドイツ・スウェーデン各地で演奏会を行う。2000年4月、初めてのソロアルバム、「佐々木真一ギター作曲集」を、又澄川孝子（ソプラノ）とギター伴奏によるCD「この道」をフォレストヒルレコーズより発売。ギター独奏の他、指導・編曲など幅広く活動している。九州ギター音楽協会副会長、山口県ギター音楽協会会長、日本音楽家ユニオン会員。カスティエーリヤギターアンサンブル主宰。フォレストヒルミュージックアカデミーギター科主任講師。2003年度下関市芸術文化振興奨励賞受賞。下関市在住。

## 夏川由紀乃 ピアニスト

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルの皆様、このたびは第40回記念定期演奏会、本当におめでとうございます。このような特別なステージで共演させていただきますことを大変光栄に思っております。私自身は今回で4度目のステージとなりますが、第一印象というか、初めに体感したのは、このオケの持つ「集中力」でした。そして、それぞれの方が音楽性や音質（特にピアノニッシモの音色）にこだわり、その上突き詰めて練習されているので、指揮者に導かれながら、より大きなうねりが生まれるのかなぁと感じております。また、毎年のように、シンフォニーをマンドリン合奏で世界初演してしまうあたり、選曲にもかなりのこだわりが伺えます。私個人といたしましては、ピアノソロやアンサンブルでは弾く機会のない作品を演奏できる事に喜びを感じ、ピアノという楽器で合奏に参加できる事を、とても楽しんでおります。この度もこの演奏会がなければ、ショスタコーヴィチの「革命」も、スコアを眺めながら、じっくり聴くことは無かったかもしれません（笑）。さてさて、音楽では饒舌なメンバーの皆様、普段はシャイなのかな？と思いきや、打ち上げでの爆発的な盛り上がり方！！やはり、ハートの温かいアツい方々です！！アットホームで、とても居心地の良い雰囲気の良い団体です。きっと、このたびの記念演奏会も通過点として、あくなき追求を続けていかれる福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル。これからの益々のご発展をお祈りいたしております。

梅光女学院高等学校を経て、桐朋学園大学音楽部音楽科卒業。第9回教育連盟オーディション本選出場（1996年）。レスブレンデル音楽コンクール第5位、審査委員特別賞受賞（1998年）。第22回PTNAピアノコンペティション特級2台ピアノ部門第2位優秀賞受賞。第8回日本クラシック音楽コンクール全国大会第2位（1位なし）。ピアノを下田直子、落合敦、江崎光世、岡本美智子、田中美江の各氏に師事。現在、マンドリニスト高橋和彦氏と共に下関と福岡にピュウ音楽教室（ピアノ科、マンドリン科）を主宰。福岡室内楽協会会員。

## 第30回以降の定期演奏会演奏曲目

### 第30回 1998年11月28日 ももちパレス

#### 指揮 松永恒一

1st メリアの平原にて マネンテ作曲  
亡き王女の為のバヴァーヌ ラヴェル作曲 安田邦彦編曲  
英雄葬送曲 ラッタ作曲  
3rd 序曲第2番ト短調 久保田孝作曲  
交響詩「失われた都」～初演版 鈴木静一作曲  
アンコール  
行進曲「威風堂々」第1番 エルガー作曲 伊藤敬明編曲  
\*2nd はシニア会メンバーによるポピュラー演奏

### 第31回 1999年10月30日 ぶくぶくプラザホール

#### 指揮 松永恒一

1st 主題と変奏 ミラネージ作曲  
組曲「田園写景」 ファルボ作曲  
2nd 主よ、人の望みの喜びよ バッハ作曲 川崎貞夫編曲  
マッティナータ（朝の歌）レオンカヴァレロ作曲  
アニーローリー アイランド民謡 小穴雄一編曲  
踊りと唄 カラーチェ作曲 中野二郎編曲  
3rd 浜辺の唄による変奏曲 中野二郎作曲  
抒情組曲「蝦夷」 鈴木静一作曲  
アンコール  
マイフェアレディ序曲 レーヴェ作曲 小穴雄一編曲

### 第32回 2000年11月11日 ぶくぶくプラザホール

#### 指揮 松永恒一

1st 彷徨える霊 ポッタキアリ作曲  
組曲「中世の放浪学生」 アマティ作曲 中野二郎編曲  
2nd アリベデルチ・ローマ ラッセル作曲 竹内雅志編曲  
カタリ カルティル作曲 中川信良編曲  
サンタ・ルチア幻想曲 ウアルター作曲  
イタリア アマティ作曲  
3rd 舞踊風組曲第1番 久保田孝作曲  
グランドシャコンヌ 藤掛廣幸作曲  
アンコール  
歌劇「魔笛」より序曲 モーツァルト作曲 ラニエリ編曲

### 第33回 2001年12月2日 ぶくぶくプラザホール

#### 指揮 松永恒一

1st 交響的前奏曲 ポッタキアリ作曲  
第二小組曲 ミケーリ作曲 中野二郎編曲  
2nd 亜麻色の髪の乙女 ドビュッシー作曲 鈴木静一編曲  
小組曲 ドビュッシー作曲 小穴雄一編曲  
3rd プレリユード2 吉水秀徳作曲  
組曲「樺太の旅より」 鈴木静一作曲  
アンコール  
ドムラとロシア民族オーケストラのための協奏曲より第1楽章  
ブダシキン作曲 河野重昭編曲

### 第34回 2002年11月24日 ももちパレス

#### 指揮 松永恒一

1st ニューヨーク マネンテ作曲 中野二郎編曲  
挽歌 ジュディチ作曲  
第三小組曲 ミケーリ作曲 中野二郎編曲  
2nd 愉快的仲間 ミラネージ作曲  
アルジェリア組曲 サン=サーンス作曲 佐藤洋志編曲  
アンコール  
管弦楽組曲第3番より「アリア」(G線上のアリア)  
J. S. バッハ作曲  
歌劇「果敢なき人生」よりスペイン舞曲第1番 ファリャ作曲  
鈴木静一編曲

### 第35回 2003年11月24日 スプリングホール

#### 指揮 松永恒一

1st シベリア狂詩曲 イワノフ作曲 小穴雄一編曲  
「2つの悲しき旋律」より「春」グリーグ作曲 小穴雄一編曲  
カレリア組曲 シベリウス作曲 小穴雄一編曲  
2nd 組曲「展覧会の絵」(全曲) ムソルグスキー作曲  
小穴雄一編曲 \*マンドリン弦楽合奏版  
アンコール  
亡き王女の為のバヴァーヌ ラヴェル作曲 佐藤洋志編曲  
火の鳥より終曲 ストラヴィンスキー作曲 小穴雄一編曲

### 第36回 2004年11月28日 スプリングホール

#### 指揮 松永恒一

1st ローラ序曲 ラヴィトラノ作曲  
夏の庭 シルヴェストリ作曲  
華燭の祭典 マネンテ作曲 小穴雄一編曲  
2nd 歌劇「カルメン」組曲 ビゼー作曲 佐藤洋志編曲  
アンコール 組曲「惑星」より木星 ホルスト作曲  
小穴雄一編曲 \*マンドリン弦楽合奏版

### 第37回 2005年12月11日 スプリングホール

#### 指揮 松永恒一

1st 組曲「吟遊詩人」 アマティ作曲 中野二郎編曲  
詩的幻想曲「誓い」 ポッタキアリ作曲  
英雄葬送曲 ラッタ作曲  
2nd 組曲「胡桃割り人形」 チャイコフスキー作曲  
小穴雄一編曲 \*マンドリン弦楽合奏版  
アンコール  
タヒチ・トロット ショスタコービッチ作曲 小穴雄一編曲  
組曲「降誕祭の夜」より3楽章「ハレルヤ」アマティ 作曲

### 第38回 2006年11月18日 スプリングホール

#### 指揮 松永恒一

1st 交響詩「フィンランディア」 シベリウス作曲  
中野 智仁編曲  
詩人の瞑想 マネンテ作曲  
瞑想曲「夢の魅惑」 ポッタキアリ作曲  
2nd 交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」  
ドヴォルザーク作曲 小穴雄一編曲 \*マンドリン弦楽合奏版  
アンコール  
間奏曲 ファルボ作曲  
誰も寝てはならぬ ブッチーニ作曲 小穴雄一編曲

### 第39回 2007年12月2日 スプリングホール

#### 指揮 松永恒一

1st 弦楽セレナーテ ホ長調 作品22  
ドヴォルザーク作曲 武藤理恵編曲  
2nd 狂詩曲「スペイン」 シャブリリ作曲 小穴雄一編曲  
スペイン組曲より「グラナダ」 アルベニス作曲  
小穴雄一編曲  
スペイン第二組曲 鈴木静一作曲 \*マンドリン弦楽合奏版  
アンコール  
歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より 間奏曲  
マスカーニ作曲 久保田孝編曲